

## 陶芸界初の文化勲章受章者

「現代陶芸のパイオニア」、「陶芸界に現れた不出世の天才」など、板谷波山(1872-1963)に冠せられた賛辞は枚挙にいとまがない。

そのくらい日本陶芸界における波山の存在は大きい。作品中、2点が国指定重要文化財。本県が生んだ日本画の大家・横山大観と同じ指定点数である。

波山は本名を板谷嘉七という。明治5年(1872)、真壁郡下館町(現筑西市)に父増太郎、母宇多の三男として誕生。生家は醤油醸造業のかたわら雑貨商も営んでいた。波山の陶号は、郷里の名山・筑波山から取った、という。本文では以下、波山と表記する。

陶芸家・波山の第一歩は、明治22年(1889)、東京美術学校(現東京藝術大学)彫刻科への入学だった。ここで波山は、同校創設に深く関わり、開校後に校長となった岡倉天心や教官の彫刻家・高村光雲の薫陶を受けた。特に芸術に対する天心の姿勢に強い影響を受けたようだ。

『板谷波山の生涯』の著者、荒川正明氏は波山の東京美術学校時代の恩師、天心の教育方針をこう指摘する。「第一に古画・古物の模写、第二に写生、第三に新案」と。「古画・古物の模写で歴史を学び、写生で自然を学び、新案で新たな芸術を生むというシステムであった」と語る。

波山の作陶姿勢は、この天心の薫陶を活かしている、という。「波山が残した2000枚を超す素描集の構成をみると、古物の模写、写生、新案という内容で組み立てられていた」と指摘する。波山は天心がいう「創造芸術」としての陶芸を目指したのかも知れない。

東京美術学校を卒業した波山は、明治29年(1896)、石川県工業学校(現石川県立工業高等学校)木彫科主任教諭に迎えられた。その後、木彫科が廃止され、新設の陶磁科を担当。ここで坏土、窯焚き、釉薬や絵の具の調合、図柄にいたるまで本格的に陶芸を研究し、幅広い実地研修を積んだ。

# 板谷波山

Itaya Hazan

陶芸で立つ自信を得た波山は、明治36年(1903)、石川県工業学校を辞職。東京府北豊島郡滝野川村田端(現東京都北区田端)に住居と工房を建て、本格的な作陶に入った。31歳だった。以後、この工房から数々の作品を世に出すことになる。

『下館市史下巻』は初窯の様子を次のように記す。「一昼夜燃やしたが、火熱は上がらない。「しまいには雨戸をはずし、天上裏の石膏の空樽まで燃やした」と。どんな苦境の中でも波山は、芸術家として生きることの誇りを失わなかった。

そんな波山に昭和28年(1953)、文化勲章が贈られた。陶芸界から初の受賞者となった。昭和38年(1963)、波山は美術雑誌『萌春』に「やき物は窯の火加減一つにかかっている。自分でここだと思うときに火を止め、薪を差し込む」と書いている。

さらに「この機を捉えて逡巡せずに決行することが陶芸での秘訣」という。そのため「常に心の平静を保つことが肝要」と自らを戒め、「どんなことがあっても一切怒らない」

という誓いを立てていたそうだ。作品に香り立つ品格を漂わせ、波山はこの年、91年の人生を終えた。(文中敬称略)

### 主な参考文献

『下館市史下巻』(昭和43年発行)。『板谷波山の生涯-珠玉の陶芸』(荒川正明著、平成13年、河出書房新社発行)。



生家敷地内に建つ波山の胸像と記念館=筑西市甲(筆者撮影)

### 歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「筑波山への思い」